

俺が好きなのは妹だけど妹じゃない

恵比須清司



ファンタジア文庫

2477

俺が好きなのは
妹だけど
妹じゃない

OREGASUKINANOA
IMOUTODAKEDDIMOUTOJYANAI

口絵・本文イラスト ぎん太郎



プロローグ

——何度でも言うよ？ わたし、お兄ちゃんのことを大大好き！ だから絶対、将来お兄ちゃんのお嫁よめさんにしてね！

「……で、できてしまいました」

私はエンターキーを押し、作品を完成させます。

同時に、顔が急激に熱くなってくるのがわかります。私は赤く染まっているであろう顔を隠すように枕まくらに抱き付いて、ベッドの上をゴロゴロと転がります。

ゴロゴロ。

「……ふう」

ちよつと落ち着きました。

今までも『お兄ちゃんノート』に同じようなことを書いてきたのですが、一つの作品として書き上げたのは初めてなので、なんだかすごく恥はずかしいです。

もしこれが発表されれば、全世界の人が私とお兄ちゃんの仲を認めることになります。

「それは……………最高ですね！」

想像すると自然と頬が緩みます。えへえへと、我ながらだらしない笑いで漏れます。ゴロゴロ。

「……………ふう」

またちよつと落ち着きました。

でもまあ、どうせ入選なんてするはずがありませんけどね。

少し残念ではありますが、そうでなきゃ応募なんてしません。気楽なものです。

……………少なくとも、この時はそう思っていました。

それからおよそ半年後。

私は自分のノートPCに届いたメールを見て立ち尽くします。

大賞受賞おめでとうございますという文面に、私は呆然とするしかありません。

そして、その時無意識の内に私の口から出た一言が、全ての始まりとなるのでした。

「……………これって、お兄ちゃんと仲良くなれる絶好のチャンスなんじゃ……………えへ……………」

第一章 俺と妹がラノベ作家になつた理由

「ただいまーっ」と

俺が玄関のドアを開けると、見慣れた靴が綺麗にそろっているのが見えた。どうやら妹はもう帰宅しているらしい。

生徒会の仕事があるはずなのに早いな……………と思ったが、すぐに俺が遅かつたんだと気がつく。……………まあ、わざわざ新刊欲しさに秋葉原まで行ってたからな。

俺は十冊近いラノベの詰まった袋を抱え、そつと階段へと向かおうとする。

「お帰りのさいにお兄ちゃん。遅かったですね」

が、リビングのドアが開いたかと思うと、制服の上にエプロンを着けた涼花が出てきた。俺はイタズラが見つかった子供のようにギクリとする。

「遅くなる時は連絡をくださいと言っておいたはずですが」

「い、いや、まだ六時をちよつと過ぎたくらいだし、遅いってほどじゃないだろ？」

「夕食の時間にも関係します。こういうことは礼儀です」

そう言って涼花は俺の抱えた袋を見る。

「また小説を買うためにわざわざ東京まで行ってきたんですか？」

「新刊を一刻も早く手に入れるためだからな。それに、店で買うと特典だつて付いて来るんだぞ？ これを無視するわけにはいかないだろ、ラノベ好きとして……！」

「よくわかりません」

実感のこもった言葉を軽く切り捨てて、涼花は無表情のまま玄関にしゃがみ込み、脱いだばかりの俺の靴をそろえた。

このいかにも堅物かたぶつそうで、終始真顔かつ冷ややかな態度の少女こそが俺の妹だ。

永見涼花——名門お嬢さま学校と名高い白桜女学院で生徒会長を務める中学三年生。成績はトップ、運動神経抜群、人望も厚く、その上カリスマ性まである完璧超人。

家にあつては家事万能で、できないことを探す方が難しいくらいだ。

性格は冷静沈着、かつ真面目。常に凜とした雰囲気りんきで、小柄ながら威厳いげんまで感じる。

容姿も、兄である俺が言うのもなんだが、街に出れば十人が十人とも振り向くであろうほどの美少女。

ここまで褒めまくると身内の鼻屑ひじくめ目めがきき過ぎじゃないかと思うかもしれない。

だが残念ながら全て事実だ。

とはいえ、それで俺が何か得するわけじゃなく、実際は逆だつたりするから困る。

「しかも、私に隠れてこそそこそと部屋に行こうとしていましたね」

「人聞きの悪いこと言うな。これでも一応気をつかってんだよ。お前、こういうラノベとかオタク系のものは嫌いだろ？」

「別に私はオタク系のものが嫌いなわけではありません。ただよくわからないだけです」

「ラノベの面白さがわからないなんて人生の十二割を損してるも同然だ！ よし、そういうことなら今から俺がラノベの素晴らしさをレクチャーして——」

「結構です」

真顔のままきっぱり拒否する涼花。

……まあこうなるってわかかって言った俺も俺なんだけど。

「それよりもお兄ちゃん、ずいぶんと服装が乱れていますね」

涼花はそう言って手を伸ばし、俺の制服を整え始める。

「昨日洗濯したばかりなのに妙に汚れていますし、ネクタイもよれよれです。袖のところのボタンなんてとれかけてますし、そう言えば靴も汚れてました。どういうことですか」

「……いや、帰りの公園で木に登って降りられなくなって子猫こねこがいてさ。飼い主らしい女の子も泣いてたから、いっちょ助けてやるかーなんて思つて」

「……それは立派ですね」

「ほら、こういう場面で助けるのがラノベ主人公的にも当たり前だろ？」

「意味がわかりません」

一瞬感心したような涼花の顔が、瞬時に冷え込む。

「やっぱりラノベ作家を志す者としては、常日頃からラノベ主人公の気持ちを理解するために相応しい行動を取らないといけないと思うんだ。うん」

「意味不明な自己完結をしないでください」

「それにあれだ、こうやって子猫を助けておくと、いつか美少女になって恩返しにやって来て物語が始まるかもしれないし……」

「お兄ちゃん、頭の病院に行きましよう」

涼花の視線がいよいよ冷たくなってきて、俺はハッと我に返る。

「ち、違うぞ？ 本気でそんな中二病的なことを考えてるわけじゃなくて、あくまでもこういう妄想がラノベ執筆の役に立つという話でだな！」

「やっぱり意味がわかりません」

そこで涼花ははあ……とため息を吐いて、

「お兄ちゃんはどうもちょっとしつかりしてください」

と、いつもの言葉を口にした。

ほとんど毎日のように聞かされている台詞だが、こうやって本当に呆れられながら言われると、さすがにちよつと凹む。

この一連の流れでわかかと思うのが、俺の妹はしつかり者だ。

ただし、頭に「超」が付くほどの。

優秀すぎる自分が基準なので、注意の内容も厳しく、かつ細かい。

そして俺は、いつもその標的にされているのだ。

一方で、俺達の間には兄妹らしいと思える交流はなかった。

世間一般でいう兄と妹と言えば、わがままな妹に対して兄が「しよーがねーな」って感じで接するのが普通なんじゃないかなと（俺は勝手に）思っているのだが、そんな微笑ましいやり取りなど、俺達の間にあつたためしはない。

「とにかく、上着は脱衣籠に入れておいてください。ボタンは後で私が直しておきます。靴は夕食までにきれいにしておいてください」

テキパキと指示を出し、不機嫌そうに俺を睨んで涼花はリビングへと戻る。

「あと、帰ってきたらまず手洗いがいです」

最後にそう言い残して、ドアを閉める涼花。

俺は盛大にため息を吐いて首を振るが、すぐに気持ちを切り替えて洗面所へと向かう。それはもうまるつきり俺達の日常の光景で、いちいち気落ちすることじゃないからだ。……そう言えば、ラノベにはいろんな妹キャラがいる。それと一緒に兄キャラも出てくるわけだが、みんながんばってるなーいつも感心してしまう。

俺の場合、兄としてがんばる機会さえ取り上げられちまつてるからな……。まあ、だからどうってわけじゃない。

どうってわけじゃないけど。

ごくたまに、そういった兄達が羨ましいなーと思うことが、なくもない。

俺の名前は永見祐。ごく平凡な高校一年生を自認している。

成績は上の中くらい。特技はない。容姿は……、まあ普通だと思ふ。

唯一、人と変わった点があるとすれば、ラノベが好きということくらいだ。

好きと言ってもただ読むだけじゃない。俺の場合、自分で書いてもいるのだ。

ラノベ大賞には、中学一年くらいの頃から応募もしている。

ただ、結果は毎回一次選考落選。通算何連敗中かは……、まあ、いいか。

そんな俺だが、いつか大賞を取ってラノベ作家としてデビューするのが夢だ。

両親に将来の夢を訊かれた時もそう答えだし、学校でも訊かれたらそう返す。

いわゆるオープンオタというやつだが、別にそれで目立っているわけでもない。TPOはわきまえているし、そもそも今の時代、オタク趣味なんて別に珍しくもないだろ？

家族は俺と妹、そして両親の四人。家は二階建ての一戸建て。比較的裕福な家庭で両親は共働きをしている。親父もお袋も忙しいのか、家を空けることが多い。帰ってくるのは夜遅く、もしくは最初から帰宅しない場合も多々ある。

そうになると、自然と妹との疑似二人暮らしになるのだが、寂しいと思ったことはない。

ただ、別の問題で困ることはあった。具体的には、今みたいな状況がそうだ。

「……………」

夕食の席。俺と涼花はリビングのテーブルで向かい合って食事をしてた。

お互い無言のまま黙々と箸を動かす。

涼花の作る料理は本当に美味しいのだが、こども静まり返った状況だとせっかくのご馳走も色あせてしまう。だから俺は時々なんとかしようとして試みるが――

「……なあ涼花。テレビつけてもいいか？」

「なにか見たい番組でもあるんですか？」

「いや、特にないけど」

「じゃあダメです。私、うるさいの嫌いですから」

……まあ、大体こうやって撃沈げきちんするのが常だった。

でも今日は珍しく、もうちよつと食い下がってみようと思つて俺は続ける。

「……でもさ、こうやって二人だけの食事とか、寂しくないか？」

「お父さんもお母さんも、お仕事なんだから仕方がないです」

「そうだけど、会話の一つもないっていうのはちよつと」

「それもそうですね。ではどうぞ」

それはつまり……、俺に話題を振れと？

にしても「ではどうぞ」から始まる家族の会話つてどうなんだ？

……でもまあ、とりあえず会話の糸口になったことには変わりないからいいか。

「えーと……、学校生活はどんな感じだ？」

「普通です」

「いやいや！ 会話はキャッチボールだろ!? そこで終わらせるなよ！」

「と言われても、漠然ぼくぜんとどんな感じと訊かれても困ります」

「わ、わかった……。じゃあ、生徒会長の仕事はどうだ？」

「今日は書類整理くらいでした」

「だから、もうちよつとこう会話が膨ふらむような受け答えをですな〜」

「……私には、特に話すようなことはないのです仕方ないです。お兄ちゃんならもつと何か話題があるんじゃないですか？」

「う、俺か……。そうだな……。そう言えばこの前偶然くわんぜん神作品を発見してな。いや、俺も数多くのラノベを読んできたがまだまだ埋うもれるる良作はあるもんで——」

「すみません。ラノベといわれても私にはよくわかりません」

「……ですよね〜」

会話しごう終了。収穫ととといえは、俺達の間には共通の話題など存在しないということがわかったことだけ。そうこうしているうちに食事しょくじも終わる。

妹は後片付けにキッチンに向かい、俺は風呂ふろを入れて自室へと戻った。

俺達兄妹の関係は一事が万事こんな感じだった。一言で言うときよそよそしい。常に間に壁かべがあるようなものだと考えてくれればいいだろう。

「いつからこんなことになったのやら……」

俺は湯船てんじゆうにつかりながら、ぼやけた天井を見上げる。

いつからって……、あの時からだよなあ。

遠い記憶の彼方からあの泣き顔が浮かんできて、俺は慌てて首を振る。

「……今更考えたって仕方ないことだ。うん」

俺はお馴染みの結論を呟き、風呂から出た。

自室に戻る途中、隣にある涼花の部屋のドアをノックする。ドア越しに風呂が空いたことを告げると「はい」という返事が聞こえた。俺はそれを確認してから自分の部屋へと入り、妹のことは頭から追いつくと、机の上に今日買ってきた新刊を並べた。

「八、九、十冊と……。さて、どれから読むか」

どのラノベを選ぶか迷う。この一時は、俺の生活の中でも最も楽しい部類の時間だ。

しばらく迷った後、俺は『スカイ・マジック・ガーディアン』略して『スカマガ』の三巻を手取る。これは俺の尊敬するラノベ作家、炎竜焰（えんりゅう）先生の作品だ。こいいので将来付けるペンネームの参考にするつもり）先生の作品だ。

いわゆる魔法バトルもので、空中を飛び交いながら繰り広げられる戦闘が燃えるのだ。

「この前はいいところで終わってたからな。さて、今回はと……」

残った九冊を丁寧に袋に戻すと、俺はベッドに身を投げ出してスカマガの世界へと入っていく。黙々と作品を読み続け、それからおよそ二時間経った頃、いかにも満足といった

感じで俺は本を閉じた。

しばらく余韻に浸っていたが、やがておもむろに立ち上がると、

「天に走る無数の光よ……。我に従い空の穢れを祓え！〈ディバイン・レイ〉！」

情感たっぷり詠唱し、虚空へと腕を突き出した。

もちろん、手のひらから聖なる光刃が出るわけでもなければ、ヒロインを追いつめていたワイバーンナイツどもを次々と撃墜していくわけでもない。

……でも、ラノベを読んで燃えた後って、こうなるのが普通だよな？

最近ではもう中二病もネタになってしまったが、一人にいる時はみんな同じことをしていると信じていた。それに、こうやって主人公になりきってこそ、自分でラノベを書く時にリァリテイのある描写ができるってものだ。

「やっぱこういう詠唱っていいよな……。次回作はその方向でいくか」

俺は机に向かうと、ノートPCを起動させた。

炎竜先生からもらった熱が冷めないうちに、執筆活動へと移ろうと思ったのだ。が、文書作成ソフトを立ち上げていると、ふとPCの日付が目に入った。

「……大賞発表って、確か今日だったよな？」

大賞とは、俺も応募している皇ファンタジー大賞のことだ。

ラノベ作家の登竜門。賞をゲットすればもれなくデビュー。

……でも残念ながら、俺はもう一次選考で見事落選してしまつてたり。

「へっ、俺が落ちた賞の大賞なんてどうでもいいね！ こっちはラノベ作家になるため、流星とかNJとかにも、なりふりかまわず応募してんだ！」

と言いつつ、ブラウザを開いてチェックする俺。……いやだつて気になるじゃないか！ それに、受賞した作品を読んで分析することも今後のために重要だしな！

「つて、俺は誰に言い訳してんだ……？ それより結果だ結果！ えーと、……お、今回は大賞が出たのか。珍しいな」

皇ファンタジー大賞はクオリティ重視だから、大賞が出ないこともよくあるのだ。

俺は期待しながら大賞受賞作品を確認する。そこには――

〈お兄ちゃんのことが好きすぎて困つてしまう妹の物語です。〉

「……こ、これまたどストレートなタイトルが来たな」

何の捻りもないが、それだけにインパクトの強い作品名に、俺は唸る。

最近のラノベ業界、奇抜なタイトルなんてそれこそ掃いて捨てるほどあるけど、これは

ど真つ向勝負な作品も珍しかった。

「名前からして妹モノのラブコメか。作者名は、えっと、永遠野誓……？ 変な名前」

ま、ペンネームはどうでもいい。問題は作品そのものだ。

正直、めっちゃ読みたい。書店に並んでたら、タイトルだけで即買いなレベルだった。

しかも、妹モノつてのがまた興味をそえられる。俺の部屋にはラノベばかりがギッシリ詰まった本棚が三つくらいあるのだが、妹ヒロインの作品の比率がなぜか高いのだ。

……あ、違ふぞ？ 別に妹だからどうつてわけじゃなくて、面白いと思つた作品を買つてたら自然とそうなたただけだからな？ リアルで妹がいるのに、そういうアレなことは決してないから！

「つて、だから俺は誰に言い訳してるんだつて！ ……そ、それにしても、大賞がこんな潔すぎるラブコメとか、これだから最近のラノベ業界は……」

俺は憎まれ口をたたきながらも、選評に目を向ける。そこには選考委員を務める先生方のコメントが並んでいたが、どれもこれも大絶賛だった。

「全ての妹モノを過去にする作品だ！」とか「際限ないデレの嵐がまさに圧巻！」とか「発売されればラブコメ業界に激震が走る！」とか、そういうすごい意見ばかりで期待はいよいよ高まる。スマホの購入予定表にメモをしつつ、俺はニヤリと笑った。

「……さてと、じゃあそろそろ自分の作品に取り掛かるかね」
 そう言ってキーボードを叩こうとした時だった。

——コンコンッ。

「ん？ はーい、いるよ」

いきなりドアをノックする音が聞こえて、俺は返事をしながら振り向く。

しかし、なぜか何の反応もなかったので、訝しがりながらドアへと向かった。

「誰だ？ ……って、え？」

ドアを開けると、俺はそのまま固まってしまった。

なぜならそこには、想定外の人物——涼花が立っていたからだ。

妹が俺の部屋を訪ねて来たことなんて、今まで一度もなかったのに。

「……涼花？ ……な、なにか用か？」

あまりに意外な展開に、おっかなびっくり訊ねる。

「……お話があつて来たんです」

しかし涼花は、いつも通りのちよつと不機嫌顔で、そんなことを言ってきた。

「お話って……、俺に？」

「お兄ちゃんの部屋を訪ねて、お兄ちゃん以外にお話できる人がいますか？」

「俺の部屋の押し入れが突然異世界につながって、そこから美少女が出てくる可能性がゼロじゃない以上、いるかもしれないと答えるしか……」

「相変わらず何を言ってるかまるでわからないんですが……。とにかく、私はお兄ちゃんに話があつて来たんです」

「お前が、俺に話がある……？」

「何度も訊き返さないでください」

……いや、それはちよつと無理な相談だろ。

あの涼花が俺をわざわざ訪ねて来て、何の話があるってんだ？

思いつくのはまたぞろ説教の類くらいしかないが、今のところ心当たりはない。

とはいえ一応脳内検索をかけてみると、一件だけ真新しいデータが出てきた。

……これは、ヤバイ。先に謝るしかない件だ。

「すまん涼花。うるさくしたのは謝る。ただちよつとハッスルしちまってな……」

「え、それはどういう」

「ラノベを読んで興奮してポージングを決めるのは、ラノベ好きとしては仕方ないことなんだ……。ポージングには決め台詞だつて必要だしな。ただ、お前の部屋まで聞こえるほど大声を出したのは悪かった。次回からは気をつけるよ」

「お兄ちゃんは部屋で一人、そんなことをしているんですか？」

「……ん？ この反応は、もしかして違ったのか？ ハズレですか？」

「えーと……、その件ではない？」

「その件についてはまた後ほど話し合しましょう」

「……どうも俺は盛大に墓穴を掘ってしまったらしい。」

「……じゃあ他になんの話があるっていうんだ？」

「そのことですが、長くなるのでお兄ちゃんの部屋に入れてもらってもいいですか？」

「はあ!？」

思わず素っ頓狂な声が出た。それだけ、涼花の放った言葉が意外過ぎたんだ。

「お、お前が俺の部屋に!？」

「廊下での立ち話で済む話ではないからです。なにをそんなに焦っているんですか？」

「べ、別に焦っちゃいけないけどさ。お前、俺の部屋に入ったことないじゃないか」

「なんですか、そんなにも狼狽して。見られたらいけないものでもあるんですか？」

俺はその言葉に「あ、あるわけないだろ？」と反射的に答えてしまった。

話の流れというのは恐ろしいもので、そうなる。「じゃあ入ってもいいですね」となり、気づいたら俺はドアの脇にどいて、涼花を部屋に招き入れてしまっていた。

「……うん、今日はちゃんと片付いているんですね」

涼花は部屋を見回しながらそう言うと、一直線にベッドへと向かい、そこに腰掛けた。

「……なんでそこに座るんだ？」

「？ だってお兄ちゃんの部屋には椅子が一つしかないじゃないですか」

「いや、そりゃそうなんだけど……、なんか動きによどみがないっていうか……。つて、そう言えばさっき今日は片付いてるとかなんとか言ってたような」

「……なんのことです？ 聞き間違いではないですか？」

俺が椅子に座りながらそう言うと、涼花はそっぽを向いてしまった。

「ま、まあいいけど……。で、話つてのはなんなんだ？ しかもこんな時間に」

「……お兄ちゃんに相談があつて、来ました」

「……………うん?」

「……今、こいつ、なんて言った？」

涼花は日本語を話したはずなのに、いまいち理解ができなかった。

「……どうしてそんな微妙な顔をしてるんですか」

「ちよっと、意味がわからなくて」

「そんな難しいことを言ったつもりはないのですが」

「いや『相談』の意味がわからなくて」

「……小学校の国語からやり直した方がいいんじゃないですか」

「バカにするな！ ラノベを書いてる人間に国語辞典は必須なんだぞ!？」

「じゃなくて、涼花が俺に相談するって状況があり得な過ぎて混乱してるんだよ！」

「もう一度言いますが、お兄ちゃんに相談したいことがあるんです」

「それはマジ話なのか……？ ウソとか冗談とかドッキリとかトラップではなく？」

「どれだけ疑り深いんですか。しかも最後の単語には悪意を感じます」

「いや……、だって仕方ないだろ？ お前が俺に相談なんて……なあ？」

「言いたいことはわかります。私だって、普通ならお兄ちゃんに相談なんてしません」

……だろーよ。

「でも、今回ばかりはお兄ちゃんに頼る以外ないんです……」

「……なにかあった？」

涼花の深刻な様子に、俺は思わず身を乗り出す。

「……ところで、お兄ちゃんは小説大賞に応募しているんですよね？」

「は……？ いや待て、そんなことより相談はどうした？」

「これも相談の一部です。で、どうなんですか？」

「どうって、お前もあの時間聞いてたんだから知ってるだろ」

今から半年ほど前、俺がまだ中学生だった頃の話だ。

珍しく両親がそろった一家四人の食卓で、ふとしたことから将来の話になった。

そこで俺はラノベを小説と言い換えて、作家になるのが夢だということと大賞に応募していることを話したのだ。その場には涼花もいたから覚えてはいるはず。

……って、そーいやなぜか涼花には、その小説つてのがラノベだつて一発でバレたんだよな。……謎だ。

「でもそんなこと、今なんの関係があるんだよ」

「……………した」

すると涼花は、俯いたままポツリとなにか呟いた。

「え？ 悪い、聞き取れなかった」

「……………しました」

「……何をしたって？」

声小さすぎて聞こえない。俺がそう指摘すると、涼花はプルプルと震えていたが、やがて真っ赤になった顔を上げて俺を見据えると、叩きつけるようにこう言った。

「お、お前って……、その……、小説とか書くの？」

だから、ようやく口から出た質問はどこかの外れなものだった。

「小説というほどのものではありませんが、頭に浮かんだことをノートに書き留めたりすることは、その……、あります」

「か、書くんだ……。意外すぎる……」

俺の中の涼花像に、ピシッとひびが入ったような気がした。

「それで、なんであのラノ……、小説大賞に送ったんだ？」

「……たまたまです。お兄ちゃんが以前リビングに文庫本を忘れて行ったことがありました。その時、何気なく最後のページを見たら原稿募集と書いてあったので——」

「応募して、それが大賞を受賞したと……？」

「実は私も応募したことを忘れていたんですが、今日になってメールが来たんです」

「メールって、誰から」

「編集部を名乗る人からです。最初はイタズラかと思って読んでいたのですが、文面の内容から察するにどうも本当みただと判断しました」

「は、判断したわけだ」

「はい。最近、知らない番号から頻繁に電話がかかってくるんですけど、それもどうや

ら編集部の方からだったようです。全部無視してたんですが」

トンデモナイことを平然と言いつつ涼花に、……俺はさっきから変な汗が止まらない。

ってか、会話もずつと上の空で、未だに脳味噌が空回りしている感覚だった。

「……って待てよ？」

その時、俺はある重大な事実を思い出す。

……そうだ、確か俺、さっき大賞発表のページで確認したよな？

「ふっ、そうだった。危ない危ない。コロッと騙されるところだったぜ……」

「え、お兄ちゃん？ いきなりなにを」

「やっぱりお前が大賞を取ったってのはなにかの冗談だな？ 一次選考敗退の俺にそんな悪質な冗談をかますとか……、くそっ、それってめちゃくちゃ残酷なことなんだぞ!？」

「なにを言ってるんですか？ ……って、お兄ちゃんは一次選考で落ちたんですね」

……なんか涼花が可哀想な人を見るような目をしているけど、無視だ無視!

「いいか？ 俺はさっき今回の大賞がなにかをちゃんとこの目で確認したんだ」

「——っ!! も、もう見てしまったんですか!？」

「ああ、しっかり見たさ。今回の皇ファンタジー文庫の大賞は（お兄ちゃんのことを好きすぎて困ってしまう妹の物語です。）ってタイトルだぞ？」

俺は勝ち誇ったように言った。

こんな明らかな妹モノのラブコメ作品を涼花が書くなんであり得ないことで――

「うう……………。そ、それです……………」

「へ？ それって、なにが…………？」

ところが涼花は真つ赤な顔で俺を睨んできたかと思うと、勢いよくベッドから立ち上がり部屋を出て行ってしまった。

が、すぐにまた戻ってきた。…………なぜか手にA4サイズの紙束を持って。

「……………。こ、これです」

「いや、だからこれって……………」

俺は手渡されたその紙の束に目を落とす。そこには――

「んなっ!?」

一枚目の紙面に印刷されていた文字は、間違いなく（お兄ちゃんのことが好きすぎて困ってしまう妹の物語です。）。だった。しかもその横には、あのペンネームまである。

「わ、私が書いた原稿です。これで信じてもらえましたか…………？」

「え？ いや…………？ ええ!? ま、マジで!?」

「だから最初から本当だって言ってるじゃないですか…………っ!」

…………こ、これは本当に大賞受賞作品の生原稿？

ってことは、本当の本当に涼花のやつがこの作品で大賞を取ったということなのか？

「……………。よ、読んでいいか？」

「え？ よ、読むんですか？ 今？ ここで？」

「そりゃそこにラノベがあつたら、読むしかないじゃないか!」

「意味がわかりません! なんですかその『そこに山があるから』みたいな論理は!」

「でも読んでみないと、本当にお前が大賞を取った作品かどうかわからないだろ!」

そう言うと、涼花は赤い顔のまま「う……………」と詰まった。珍しい反応。

「くっ、こういう時だけは頭が回るんですね…………っ。こういう時だけはっ」

「なんで二回言つた!」

「…………わ、わかりました。信じてもらうためには仕方ありません…………っ」

でもです! と、涼花はキレ気味に続ける。

「そ、その作品はあくまでもフィクションですから! 実在の人物や団体などには一切関係がありませんから! も、もちろん私とそのタイトルとはなんの関わりもないので決して勘違いはしないでください!」

「な、なんだよ、それなら大丈夫だって。俺はラノベとリアルを混同するようなことはし

ないからさ。じゃ、そういうことで読ませてもらうからな？」

俺は許可をもらったということで、涼花の返事を待たずにページをめくり始めた。

……あんなタイトルで皇ファンタジー大賞を取った妹モノだぞ？ その生原稿かもしれないものが目の前にあるんだぞ？ これを読まずにいられるかって話だ！

俺は今までこれほど集中したことがないというくらい集中して、原稿を読み進める。

その物語は、ごく普通の現実世界を舞台に始まった。

ありきたりの家庭で育った兄妹。主人公である兄の涼はラブコメにあるまじきハイスベックイケメンに書かれていて、一方妹の祐花は気弱で儂い存在だ。

あまりにも性質が違ふ二人はどこかぎこちない関係の日々を送っていたが、ある日兄は妹から突然の告白を受ける。戸惑う兄に迫る妹。妹のアプローチはだんだんと激しくなっていく、日常はがらりと変わっていく――。

……正直、話の筋だけ追っていくと、何の捻りもないラブコメだった。

俺だったらプロットの段階で容赦なく没にするレベルのストーリーだ。

……でも、でもなんなんだ!? この面白さは!

ってか、妹のキャラが可愛すぎるんですけど!? 兄への好意が溢れすぎて、あらゆる場面がニヤニヤできちまうじゃねえか!

「……………ちゃん」

それに兄のキャラもカッコ良すぎだろこれ! どんだけごく自然に妹のために行動してんだよ! そのくせ好意には全然気づいてないし、ラブコメ主人公の鑑だな!

「……………お兄ちゃん」

……くそつ、なんなんだよこれ。今までこんなラノベ、出会ったことがないぞ?

そりゃ夢中で読みふけた神作品は過去にいくらでもある。でもこいつはどこか次元が違う。何もかもが粗いのに、そんなことはまるで気にならないくらい面白なんだ。

……なんでこんなに面白く感じるんだ? 理由が全然わからん……。

ああでも、この妹は可愛すぎる! 理想のラノベヒロインだろこれ!

「お兄ちゃん!」

「はっ!」

その声に我に返った俺の目の前には、拗ねたような涼花の顔があった。

「わあっ!? す、涼花!? なにやっぺんだお前!」

「それはこっちの台詞です。さつきから何度も呼んでるのに、全然返事をしてくれなかったじゃないですか」

……そ、そうなのか? 全然聞こえなかった。

「いや、すまん……、ちよつと読むのに集中しててだな……」

「——っ！ も、もしかして面白いんですか？」

「そりゃ——」

面白い。めちゃくちゃ面白い。

そう言おうとしたが、なぜかその一言が出なかった。

「ま、まあまあじゃないか？ まだ一章が終わったとこだからなんとも……」

その代わりに口にしたのは、我ながらはつきりしない言葉。

「……む、そうですか」

涼花は唇を尖らせて、

「でも、これで私が大賞を取った作品の作者だつてわかってくれましたか？」

「あ、ああ………、いやいやいや！」

俺は一瞬^{いっしゆん}頷^{うなず}きかけたが、すぐに勢いよく頭^{かぶり}を振^ふった。

確かに作品名もペンネームも間違^{まちが}いない。それにこうやって現物もある。

……でもな？ ちよつと待つてくれ。やつはそんなことあり得ないって。

「あのな、これつて兄妹もののラブコメだぞ？ しかも妹の方が兄に迫る話だし。こんな兄好きなキャラをお前が書くわけじゃないか」

「そ、そうですか？ 私には別にそんな兄好きとは感じられませんでしたけど？」

おいおい、そりゃないだろ……。タイトルからしてそれを宣言してる上に、実際の文章中はもつとわかりやすいんだ。たとえば——

「この台詞とか見てみるよ。『お兄ちゃんつてあつたかいね。これからは夜もこうやつて一緒に寝^ねていい？』とかさ」

「なっ!? い、いいいきなりなを口走っているんですかお兄ちゃんは！」

「なにをつて、これお前が持つてきた原稿じゃないか……」

まあ確かに台詞の内容がアレなので朗読するのも恥^はずかしいのだが、これも俺の言い分が正しいと証明するためには仕方がないことだ。

「こつちには『えへ、お兄ちゃんにナデナデされると、ぼわ／＼って幸せな気分になるんだよ？ だからもつとナデナデしてほしいな』なんてのもあるし。それにこのページになんてストレートに『わたし、実はお兄ちゃんのこと大好きなんだよ？』つて——」

「だから！ そ、そんな恥^{から}ずかしい台詞を今ここで口に出さないでください！」
声と一緒に身体^{からだ}まで震^{ふる}わせながら、涼花は俺の手から原稿をひったくった。

顔色は今にも爆^{ばく}発^{ぱつ}しそうなほど赤い。

「な、なんてデリカシーがないんですかお兄ちゃんは！ 言つておきますけど、これはフ

イクションですからね！ か、勘違いだけはしないでください！」

「でも、これでわかったら？ あんな台詞を言う妹キャラをお前が書くなんであり得ないってことを俺は言いたいの！」

「う……っ！ そ、それでもっ、これは私が書いて大賞を取った作品なんですっ！」

「じゃあなんで、こんな兄妹のイチャイチャラブコメなんて書いたんだ？」

「そ、それは……」

俺の根本的な疑問に、涼花は赤い顔のまま苦しげに顔をしかめる。

……いや、だから、なんで俺をそんなに睨にらむんですかね……。

「……そうでした、そうでしたね。勘違いされてはいけないので、それについては説明が必要でした。とはいえ、ただ単に魔まがさしたということなんですけど」

「へ？ 魔がさしたって……」

「ええ、そうです、魔がさしたんですよ。いいですか？ 魔がさした、重要なことなのでここはしっかりと覚えておいてください。そもそもです、私がこんなお兄ちゃんのこと大好きですと好きで長年その想いを隠かくし続けてきた妹の物語を書くなんて、それ以外の理由があるはずじゃないじゃないですか！ そうですよね！」

「そ、そりゃそうかもしれないけど、でもその説明はどうなの!？」

いつもの涼花らしくない非論理的な説明に、俺は戸惑う。しかもなぜか早口だった。

「それともなんですか？ お兄ちゃんはアレですか？ 私がこんな作品を書いたのは、私がそう望んでいるからとでも思ってるんですか？ 私がお兄ちゃんのことを、その……、す、すす好きだからにやんで思ってたりますかそうなんですしゅかつ!？」

思いつきり噛かみながら、涼花はそう言い放った。

いや、実はな、俺もさつき一瞬いっしゆんそんなことが頭に浮うかんだんだ。こいつ、ひよつとして俺のことが、その……、好きだったりするんじゃないか……？ ってな。

でも、次の瞬間に「それはないな」と即却そくきやく下した。あり得ない妄想もうそうだからだ。

だってあれだぞ？ あの涼花だぞ？ 俺の妹だぞ……？

うん、それだけは絶対じゃないね。断言できる。本棚ほんだなと、ついでに段ボールに詰めて押し入れにしまつてある俺のラノベコレクション全冊を賭かけてもいいくらいだ。

……そもそも、俺はあの時はつきりと「お兄ちゃんなんて嫌い」って言われたしな。

「……いや、そんなこと思っていないよ」

だから俺は、きつぱりとそう答えた。そんなあり得ない可能性より、涼花が言った魔がさしたって説明の方がはるかに納得なつとくできる。……ってか、実際そうなんだろうさ。

「……………わかってもらえればいいんです。はあ……」

すると涼花は一瞬ものすごく不機嫌ふきげんそうな顔をして、ブイツとそっぽを向き大きくため息を吐いた。……なんなんだ。

「安心しろって。俺も妹モノのラノベは何冊も読んできたけど、リアルであんな展開あるわけないってちゃんとわかっているからさ。誤解なんてするわけないぞ？」

「……ええ、ええ、そうでしょうとも。そうですね。はい」

……なんでキレ気味なんですかね……。一応気をつかったのに……。

「……とにかく、これで私が大賞を取ったと、いい加減信じてもらえましたか？」

どこかなげやりな口調で、涼花は言う。

……まあ、さすがにこうやって原稿げんこうまで持ち出されたら信じるしかなかった。

「なあ、魔がさしたからって、作者が思ってもないことを書けるもんなのか？」

「……そ、そこは訊かれても困ります。これを書いた時のことは私も詳しく思い出せないんですから。でも、きつとなにかに取り憑よかれていたんでしようね。あの時私は私であって私ではなかった……。芸術活動の深淵とくえんを覗いたような気分ですね」

「いや、その理屈りくつはおかしくないか……？」

「わ、私の意思で書いたものじゃないんですから、そう言うしかありません」

確かにあれは涼花の意思で書いたもんじゃないってのはわかるけどさ……。

「……でも、そういう魔なら俺にもさしてほしいよ」

「お兄ちゃん？」

「……はっ!? ち、違うぞ? 長年応募おひらしてる俺が一次選考も突破とくぱしたことすらなのに、お前が魔がさして書いた作品が大賞を取って悔ゆるしいとか切ないとか泣きそうとか、そういうことは全然ないからな!」

「お兄ちゃん……、ちよつとわかりやすすぎませんか？」

ぐ……っ、仕方ないだろ! 本当は悔しいし切ないし泣きそうなんだから!

……くそっ! こんな残酷ざんくなことってないよ神様! よりにもよってなんで妹なんだよ! 出来の違ちがいは普段ふだんの生活で嫌いやというほどわかっているんだから、俺の愛するラノベ分野でまでこんな仕打ちをしなくてもいいじゃないですか!

「うう……、お前の相談さだんってこのことなのか……? だったらおめでとう……。大賞受賞とかすごいよ。うん、素晴すばらしい。……で、俺はショック——じゃなかった、急に眠ねむたくなってきたんで、そろそろお引き取り願ねがってもいいですかね……?」

「どれだけショックを受けてるんですか……。それに、相談はまだ終わってません」

傷心の俺に続行宣言ぞくぎょうせんげんをする涼花。容赦ようじやうがない。

「そもそも、ラノベ大賞を取ったってだけなら単なる報告ほうこくじゃないですか。お兄ちゃんが

なかなか信じてくれないから話が進まないんですよ」

「……仕方ないだろ。あんなことをすんなり受け入れろって方が無理な話なんだから。」

「とにかく、私は小説大賞を取りました。ですが、困ったことが一つあります。それは、このままでは私は作家になれないということです」

「……は？ な、なんで!？」

「理由は二つあります」

一つ目——と涼花は人差し指を立てた。

「私に通う白桜女学院ではアルバイトのような行為は一切禁止されています。作家がアルバイトに当たるかどうかはわかりませんが、お金の問題が発生する以上ダメでしょう。それに私は生徒会長です。生徒会長が率先して規則違反をするわけにはいきません」

そして二つ目——と中指も立てる。

「両親のことです。お母さんとはかく、お父さんは私が作家になるのを決して許してはくれないでしょう。厳格な人ですから、必ず反対されます」

「た、確かに、言われてみりゃその二つはとんでもなく高い壁だけど……」

というか、そもそもあんなタイトルのラノベを涼花が書いたなんて知ったら、あの親父のことだ、激怒どころでは済まないような気がする……。

待てよ？ ってことは、涼花の作品が世に出ない可能性があるってことか？

……あれだけ面白そうなのラノベが？ 俺を始め、全国数千人のラノベ作家志望者を蹴散らしてトップに立った神作品がお蔵入りだと……？

「ままま待て！ れれれれ冷静に考えるんだ！」

「……私はお兄ちゃんと違い、いたって冷静ですが」

「お、落ち着けよ？ 大賞を取ったのにラノベ作家になれないとかあり得ないだろ……？ そ、そうだ、お前自身はどうしたいって思ってるんだよ、涼花」

「私は、自分の作品を多くの人に読んでほしいと思います」

意外なことにハッキリとした答えが返ってきて、俺は少し面食らった。

「そ、そうか。お前がそう思ってるんならいいんだ。じゃあつまり、その二つの壁をどうするかってことを俺に相談しに来たわけだな？ よし、それなら俺も一緒に考えて——」

「いえ、その必要はありません」

俺が早速腕を組んで思考モードに移ろうとしていると、涼花が遮った。

「私には既に考えがあるんです。それが、相談の本題です」

そう言って涼花は、一度小さく深呼吸をして続けた。

「……お、お兄ちゃん、私の代理人になってくれませんか？」

「……………は？」

しかし俺は、涼花の言葉が理解できず、真顔で訊き返した。

「え…………と？ 代理人…………って？」

「つまり、私の代わりにお兄ちゃんにラノベ作家を名乗ってほしいんです。実際の作品は私が書きますが、世間一般的にはお兄ちゃんが作者であるよう振る舞うと」

「あ、そうか…………。そうすりゃ学校のことも親父のことも問題じゃなくなるから…………」

要するに、ゴーストライターの逆バージョンということらしい。だから代理人か…………。

それって天才的なアイデアじゃないか…………？ 俺だつたらとても思いつかないぞ。

「なるほどな…………。俺が表向きには今回の受賞者ってことにして…………、って待てよ？」

しかしそこまで考えて、俺はふと引つ掛かりを覚えた。

「代理人って考えはいいけど、なんで俺なんだ…………？」

「そ、それは…………。お兄ちゃんならこの業界にも詳しいでしょうし、もう事情も知ってしまつたわけですから、その、適任だと思ひましてっ」

「一方的に知らされたような気がしないでもないんですけど!?」

…………待て待て。そうじゃない。もつと根本的な問題があるだろう？

「じゃなくてだ！ 俺は自分の力で大賞を取つてラノベ作家になるのが夢なんだぞ？ そ

れはお前も知つてるだろうが！ 他人の作品でラノベ作家になんてなれるか！」

「で、でも、これはあくまでも代理人ですし！」

「それだから余計にだよ！ 悪いけど、俺には代理人なんて無理だからな！」

俺がそう告げると、涼花は必死な様子で涙目にまでなつて、

「でもでもっ！ こんなことを頼めるのは、私、お兄ちゃんしか…………っ！」

その一言が、俺の胸にグサリと突き刺さる。いつも毅然とした態度の涼花が不安そうな顔をしているだけで、正体不明の痛みが全身を駆け巡つていくみたいに感じた。

あの涼花が俺に頼みごとをしている。

現実ではあり得ないと思つていたことが、こうやって目の前で起きてしまつている。

いつもクールで優等生で完全無欠だったはずの俺の妹。

それが、今はこんなにも弱々しい姿を見せながら助けを求めてくるなんて。

そんな涼花を突き放すなんてこと、俺にできるのか？

妹の必死の頼みを断るなんて、そんなこと——

「…………だああっ！ もうっ！」

俺は居心地の悪い気分を吹っ飛ばすように声を出す。そして、

「わかったよ！ 俺がその代理人、引き受けてやるよ！」

ほとんどヤケクソになりながらも、俺は自分の正直な気持ちからそう言い放った。

……嫌いな兄貴に頼み込んででも作家になりたいって思ってる妹を突き放すなんてこと、できるわけないだろうが……っ！

そんなのはラノベ主人公的にも、……俺的にも絶対あり得ない選択肢なんだよ……っ！

「……お兄ちゃん？ 本当ですか……？」

涼花は目を見開いて、潤んだ瞳で俺を見つめている。

……ああ、本当だ。本当……なんだけど、涼花の真っ直ぐなその視線が、なぜか急に恥ずかしくなってきた。

あ、あれだよ。辞退なんてさせたら、こいつの作品が誰にも知られずに消えて行ってしまうわけだろ？ あの神作な気配しかない作品がだ。そんなこと、ラノベを愛する者としても許せるわけがないってことで――

「……お兄ちゃん？」

俺は照れくささのあまり、その気持ちを誤魔化すように続ける。

「た、ただし！ さっきも言った通り、俺は自分の作品でラノベ作家になりたいんだ。だ

から、俺が自力で賞を取った時点で、お前の代理人からは何があっても降りるからな！」

「あ……、はい！ そういう条件ならぜひお願いします！」

「おい待て！ 今なんか安心しなかったかお前！」

「お兄ちゃんのこれまでの実績を鑑みると、そこは大丈夫だと思えますから」

「どういう意味!?」

妹の容赦のない言葉に、俺はちよつと泣きそうになる。

何一つ反論できないのがまたヒドイ。元々兄の威厳なんて欠片もなかったけど、ここまでボロクソに思われてるってあんまりじゃないですかね？

くそ……っ、いつか絶対ラノベ作家になってその認識を覆してやるからな……っ！

「でも、よかったです……。お兄ちゃんならきつと引き受けてくれると思ってました。本当に、ありがとうございます……！」

……それでも、こうやって目尻に涙を残したまま、頬を染めてうれしそうに微笑んでいる涼花を見ると、俺の判断は間違ってたんだと思ってしまう。

ってか、こうやってこいつが笑ってるとこ見るのなんて、何年ぶりだ……？

この笑顔を見てると、なんか「まあいいか……」って気分になってくる。

「……あ、兄貴が妹を助けるのは当たり前だからな……！」

俺が照れ隠しでそう呟いた時、突然ズリリリ……という音が室内に鳴り響いた。なんだと思っていると、涼花が携帯（スマホじゃなくガラケー）を取り出す。

「あ、ちよどこかかってきたみたいです。ではお兄ちゃん、お願いします」

「へ？ お願いつて……、まさか俺に出ろってこと？」

「はい。メールに返信したら、編集の人から今晩電話をすると返ってきたんです」

「へ、編集!? って、ちよつ、そんないきなり……っ」

手渡してきた携帯を、俺は慌てて受け取る。

編集って……あれだよな？ 出版社の編集者って意味だよな!

ど、どうしよう……、本物の編集からの電話だ。まるでプロ作家みたいじゃないか!

いや、本当にプロ作家なんだって！ 俺が大賞を取ったわけじゃないけども！

「なにをしてるんですか？ 早く出ないと」

「わ、悪い！」

涼花に促され、俺は震える手で通話ボタンを押す。

「もっ！」

そして噛んだ。もしもし、と言おうとして思いつきり噛んでしまった。

『もしもし？ 私は皇ファンタジー文庫の編集者で篠崎麗華と申します』

聞こえてきたのは、意外なことに女の人の声だった。